

花朝かちようでんこう澱江くだを下るくだ
(藤井竹外ふじいちくがい)

桃花水暖送輕舟 背指孤鴻欲沒頭
雪白比良山一角 春風猶未到江州

桃花とうか 水みず 暖あたたかにして 輕舟けいしゆうを 送おくる

背指はいしす 孤鴻ここう 沒ぼつせんと 欲ほつするの 頭ほどり

雪ゆきは 白しろし 比良山ひらさんの 一角いっかく

春風しゅんぷう 猶なお 未だいま 江州かうしゆうに 到いたらず

解説 この詩は伏見あたりから舟で淀川を下ったときによんだもの。

語釈 ※花朝Ⅱ説に陰曆二月十二日のこと。花神の生まれた日といい、また百花の生まれる日という。※澱江Ⅱ淀川のこと。※桃花水暖Ⅱ桃花が咲き川の水も温んでいる。※背指Ⅱ後方の空を望む。※孤鴻Ⅱ二羽の雁。※比良山Ⅱ滋賀県の琵琶湖の西岸にそびえる高山。※江州Ⅱ近江の国(滋賀県)。

通釈 桃の花が咲き、水も温ぬるむ淀川を、わが乗る小舟は流されてゆく。ふと川上のほうをふり返ったとき、一羽の雁が遠い空のかなたに消え入ろうとしているのが目にはいった。雁のゆくてに高くそびえる比良山。その一角にはまだ残雪が白々と輝いている。とすると、春風はまだ江州には訪れていないのであろう。